

高校生へ  
私が選んだ  
1冊の本

ウナギ 大回遊の謎

塚本 勝巳：著

PHPサイエンスワールド新書

この本を読んで

ウナギはその辺の川にいるものだと私は思っていた。土用の丑の日に蒲焼にして食べる、最近価格が高騰しているらしい、その程度の認識しか持っていなかった。ましてやウナギが太平洋の真ん中から日本に来ているなんて思ってもいなかった。この本では、ウナギの産卵場所に辿り着くまでの、行き詰まっては着眼点を変えたり、時には原点に戻ってみたりと、研究において試行錯誤する過程を、細かく著者の感情を交えながら書いている。

ウナギの話に先立ち、著者がウナギの研究の前に取り組んでいた、アユの回遊について触れている。これがまず非常に驚かされる内容だった。琵琶湖にはからだのサイズが大きく異なる大アユと小アユが存在し、ながらく別種と考えられてきた。著者らは、回遊の追跡・分析をすすめて、世代が代わるたびに大アユと小アユが交代する、という「スイッチング・セオリー」を提唱し、この定説が間違いであることを明らかにした。この論文は、海外では驚きをもって好意的に迎えられたのに、アユにゆかりの深い日本では別種だという定説が根強く、なかなか受け入れられなかったらしい。私はこの話から、思い込みや先入観、すでにある定説が研究の進展を妨げてしまうことがあるのだと知った。

ウナギの研究についても同様のことがうかがえた。ヨーロッパで、レプトセファルスという、ウ

ナギとは似ても似つかない姿の小魚がウナギの幼体だと初めて分かったとき、レプトセファルスが採集された地中海がウナギの産卵場だと多くの研究者は思い込んだ。ながらく地中海内で産卵場所探しが続けられたために、研究は長らく停滞した。実際の産卵場ははるか遠く離れた大西洋のかなたで、成長しながら地中海に入ってくる、というのが最終的に判明した事実であった。また、日本のウナギ研究でも、産卵時期についての先入観が研究の邪魔になったようだ。冬に日本を出た親ウナギは、1年かけて産卵場に行き冬に産卵、生まれたウナギはまた1年かけて冬に日本の河口に戻ってくる、という行き帰り2年サイクルの生活史が信じられていたために、長い航海を伴う産卵場調査が冬に行われ続けた。耳石解析の結果から「産卵期が夏らしい」とわかるまで、成果が得られない年月が続いたという。これらのことから、常識に囚われず、柔軟な姿勢でものごとに取り組むことが、研究においても大切なのだと感じる。

この本では、資源としてのウナギの状況についても述べられている。ニホンウナギは、1970年ごろの最盛期と比較すると、約10%にまで減ってしまっているようだ。近年の価格高騰は何よりもこれが理由である。乱獲、河川環境の悪化、産卵場を含む海洋環境の変化など、様々な原因が挙げられている。人とウナギは、食文化、養殖技術、資源保全問題など、広くて深い関わりがあり、多方面から包括的、総合的に捉えることが必要だと著者は述べている。産卵場発見の成果は、養殖技術への寄与や、ウナギの生態解明にとどまらず、様々な分野の間につながりを作り、人々がウナギ資源に向き合う姿勢を変えていく契機になった。

理系に進む人間として、この本から学んだ、定説にとらわれず、多角的に物事を見つめてアプローチすることの大切さを忘れずにいたい。

(大阪府立茨木高等学校2年 宮野 真心)

通巻第79号

2016年3月25日 印刷

2016年4月1日 発行

©編集・発行

実教出版株式会社

代表者 戸塚雄三

定価 (本体200円+税)

発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町5

TEL. 03-3238-7777

<http://www.jikkyo.co.jp/>